

筑波山麓・里山の暮らし 2

高21回鴻巣(旧姓大久保)茂君の生まれ故郷の旧筑波町(現つくば市)平沢集落では、隣接する6軒で常会組合が結成され、冠婚葬祭が取り仕切られていました。また、平沢東地区30軒で講が作られ、女たちの十九夜講、男たちの庚申講などが行われていました。今号では、彼の子ども頃の頃における、平沢集落での年中行事について伺いました。  
【 】内は筆者による注記です。



筑波山系に囲まれた平沢周辺の俯瞰図

正月

年の瀬になると、集落の各家庭では、神棚・床の間・玄関、屋敷内の祠に祀つてある稲荷・天神・氏神、更には竈・井戸などに注連縄(しめなわ)を飾り、お供え餅を供えます。そして、元旦には、家長である父が若水を上げて、拝礼して回り、家族全員が揃ったところで、母が作った雑煮を頂きます。雑煮を男手で作る家もありますが、これは、正月三が日には、女性は家事を含む一切の労働をしない、という風習が残っている家でのことです。三が日が過ぎると、伊勢神宮のお札が配られます。古くは、神宮の御師が年末年始に回って来たり、村落の代表が伊勢まで参詣に上っていましたが、当時は、講元の家に郵送され、それが配付されてきました。お札が配られると「鍬入れ」です。これは、農家の仕事始めの儀式で、父が鍬を持って田んぼに行き、御幣を立てて鍬を入れます。開墾や新築工事・植樹などの際に、その土地の神を祭つて鍬を入れるのと同じで、その年の農作業の無事と豊作とを田の神に祈願するものです。

節分

2月3日の節分には、鯛の頭を刺した柵(ひいらぎ)の枝を玄関の柱の隙間に挿し、私が、「福は内、福は内。鬼は外、鬼は外。福でもって【鬼を】ふっ止め

ろ！」と大声で豆を撒きました。これは、季節の変わり目には邪気【病気や災厄をもたらす悪い気。鬼に例えられる。】が生じると考えられ、それを追い払うための行事です。豆撒きが終わると、一家揃って豆茶を飲み、自分の年齢【数え年】と同じ数だけの豆を頂きます。これは、体が丈夫になり風邪を引かなくなる、という言い伝えですから、子どもたちは、炒った大豆【注1】をきちんと数えてから食べました。

節分の翌日が立春。近くの禅寺に行く、厄除けのために、門柱に「立春大吉」と縦に書かれた「立春符」が、貼られています。立春大吉、それ自体がめでたい意味の語で、「立春符」は左右対称ですから、1年間、災難に遭わないというお呪(まじな)いです。古代漢字学で著名な白川静氏は、著書『字通』などで、「文字【漢字】には呪能がある。それ自体が呪術的な力を持っていて、左右対称の文字には、幸運をもたらす力がある。」と述べられています。左右対称という点では、自動車会社のエンブレムも、その多くが対称図形【線対称・点対称】になっています。これも事故に遭わないためのお呪いなのだろう、と思います。私は、この「立春大吉」の文字を目にすると、何となく嬉しく温かな気分になります。今よりも厳しい寒さでしたが、露の臺【ふきのとう 露の若い花茎】が芽を出し、馥郁たる梅の香も漂ってきて、冬が漸く終わりを告げ、万物が活動をまた始めるのだ、と感じられたからです。

初午(はつうま)

初午とは、2月の最初の午の日に行われる稲荷神【注2】の縁日です。稲荷神社の総本社である京都伏見稲荷大社の主祭神・宇迦御霊神(うかのみたまのみ)が稲荷山へ降臨した日が、711(和銅4)年2月の初午の日であったことか

ら、祭が行われるようになりました。稲荷神は、山城国稲荷山【現在の伏見稲荷大社】に鎮座する神で、伏見稲荷大社から勧請【かんじょう】神仏の分身・分霊を他の地に移し祀ること【されて、笠間稲荷など全国の稲荷神社などに祀られています。また、神仏習合思想によって、仏教における茶枳尼天(だきにてん)と同一視され、豊川稲荷を代表とする仏教寺院にも祀られています。日本の神社の中で、稲荷神社は、主祭神としている神社が2970、境内社や合祀社などの分祀社が3万2千を数え、更に、個人や企業などに祀られている屋敷神や、山野や路地の小祠まで入れると、稲荷神を祀る社は、膨大な数に上ります。江戸時代には、江戸の町の至る所で見掛けられ、川柳に「火事喧嘩 伊勢屋稲荷に 犬の糞」と詠まれるまでになりました。本来は、穀物・農業の神でしたが、現在は、殖産興業神・商業神など、産業全般の神として信仰されています。稲荷神社の前には、狛犬の代わりに、宝玉を銜(くわ)えた狐の像が置かれています。狐は、穀物を食い荒らす鼠を捕食することや体の色や尻尾の形が実った稲穂に似ていることから、元々は農業神であった稲荷神の使いとされるようになりました。

この初午の頃に作られる料理が、「すみつかれ(しもつかれ)」【注3】です。「すみつかれ」は、栃木県の南部、群馬県の一部、茨城県の西部【小貝川流域】など、鮭が遡上する地域に伝えられてきた郷土料理です。細かく刻んだ塩鮭の頭、下ろし大根・人参、炒り大豆、揚げを暫く煮込み、更に酒粕を入れて2〜3時間、汁気が殆ど無くなるまで弱火で煮て、仕上げに砂糖、醤油、酢で味付けをしたものです。藁苞【わらぶと】に入れて、稲荷や氏神にお供えし、家の

屋根にも放り投げて家内安全を祈り、大豆【さざげ】の赤飯とともに、隣近所に配ったり貰ったりする習わしも、初午の日には行われていました。この「すみつかれ」は、正月の新巻鮭の頭・節分の大豆・野菜の切り屑などの残り物を余すところなく利用し尽くす点では、「けんちん汁」と同じですが、けんちん汁ほどポピュラーではありません。それは、見た目が吐瀉(としゃ)物に酷似していて、そのインパクトが強烈なことから、酒粕を使っているのが好き嫌いがはっきり分かれることによるのでしょう。栃木県では学校給食で出される地域もあります。が、子どもたちからは頗る評判が悪いそうです。が、我が家の「すみつかれ」は、少々違って、鮭の頭も酒粕も入れず、下ろし大根・人参・蓮根、炒り大豆、油揚げだけの、酢で味付けしたものです。膾炙(えいせう)の物のようでしたので、特段美味しいとは思いませんでしたが、抵抗無く食べられました。

#### さなぶり・まち(まち) (注4)

「さなぶり」とは田植えの後の、「まち(まち)」とは稲刈り後の慰労の日・休養日です。餅・赤飯・天ぷら・きんぴらなどのご馳走が並びました。普段は、麦飯(白米8割・大麦2割)ですので、餅や赤飯もご馳走です。「よいまぢ」「ほんまぢ」「うらまぢ」と3日間に亙る「まぢ」には、他家に嫁いだ叔母たちも、私の従姉妹に当たる娘たちを連れて、実家に帰って来て、2泊ほどして行きました。従姉妹たちとは、ほぼ同じ年齢の私が遊び相手となりましたが、私は男だけの兄弟ですので、女の子にどのようにつながらよいか分からず、あまり話もしませんでした。叔母たちは、何もせずのんびりと過ごしていました。嫁ぎ先での気苦労を忘れられる一時だったのです。

#### 子ども奉納相撲

10月には、子ども奉納相撲が行われました。常福院観音堂場所と平沢八幡社場所とが、1〜2週間の間隔を置いて開かれました。小学5年生が勧進元となり、運営を取り仕切ります。先ず、集落全戸を奉加帳を持って回り、寄付金を募ります。100〜500円と額は違いますが、協力してくれました。寄付金が集まると、北条へ賞品を買いに行きます。ノートなどの学用品、剣玉や独楽(こま)などの遊び道具、餅焼き網などの日用品を買いました。前日には、5年生の親も加わって、土俵の整備や諸々の準備をします。土曜日の午後か日曜日に開催されましたが、当日は、集落の5年生までの全員が集まり、4年生までが総当たりで取り組みます。女子は応援です。男子には全員に賞品が与えられましたが、女子にはお菓子だけでした。5年生の親たちは、おにぎりや蒸かした甘藷を振る舞ってくれました。1・2年生の頃は、勝ち進めて、賞品もたくさん貰っていたのですが、3・4年になると、体の大きな子に最後は敗れて、悔しい思いでいっぱいでした。



平沢八幡社と六角地蔵石幢(県指定重要文化財)(上)  
平沢八幡社場所の土俵跡(白線部)(下)

#### 師走

師走に入ると、各家庭で味噌・醤油作りをします。秋に収穫した大豆を大釜で煮て、杵で潰し、北条の麴店から購入した麴と塩とを一緒に、樽に仕込みます。味噌は殆どの家で作っていましたから、それぞれが「手前味噌」を持っていました。我が家では、醤油は作りませんでした。我が家では、納豆を作りました。煮た大豆を藁苞(わら)に入れ、藁小屋で発酵させると納豆が出来ます。「糸引き納豆」としても食べますが、殆どに塩を振り天日干しをし、「干し納豆」を作りました。保存食になり、ご飯の友になりました。特に熱いお茶漬けでは、香もよく、何杯でもお替わりできました。

また、年末には、沢庵・白菜・らっきょうなどの漬物作りも行われます。我が家では、季節毎に、梅干し、胡瓜・茄子漬けなども作っていましたから、自家製の漬物がいつも食卓に上っていました。食事のメインは、ご飯・味噌汁・漬物・卵・梅干しが定番で、その他の惣菜が加わると嬉しくなりました。

年も押し詰まると、集落のあちこちから餅搗きの音が聞こえてきます。我が家でも一家総出で餅を搗きます。朝早くから竈で餅米を蒸かすのは私の役目です。米が蒸し上がると、父や兄たちが杵を振るいます。私も搗かせてもらいました。が、杵が重く、2〜3回搗くと、交代するしかありませんでした。搗き上がるのと、父と母とでお供えや申し餅にします。私たちは、搗き立ての餅に醤油や海苔を付けて頬張りました。杵と臼(注5)とで搗いた餅は、一味も二味も違います。もう一度、杵で搗いた餅を食べたいと思います。最近では家庭用の餅搗き器で搗くようになり、また、餅搗き自体を行わない家も出てきたので、叶わぬ願いのようです。

(注1) 炒った大豆 豆は「魔滅」に通じ、鬼に豆をぶつけることにより、邪気を追い払い、一年の無病息災を願う。使う豆は、炒った大豆(節分は、旧年の災厄を豆とともに払い捨てるものでもあり、撒いた豆から芽が出ては不都合であったため)であることが多いが、北海道・東北・北陸・南九州では、落花生を撒く所もある(大豆よりも回収し易く、殻ごと撒くため地面に落ちても食べられる、などの利点がある)。

(注2) 稲荷神 『土浦のお稲荷さん』(土浦稲荷研究会編)によれば、土浦市内にも、旧水戸街道沿いに52、他の土浦地区に75、新治地区に25、合計152の稲荷社が祀られている。

(注3) すみつかれ(しもつかれ) 日光市今市では毎年2月11日に「全日本しもつかれコンテスト」が開催されている。「しもつかれ」の鉄人を決めるコンテストで、県内各地から約30点の自慢のコンテスト品され、歴代の鉄人のもも販売される。一般来場者が、食材や味付けなどに工夫を凝らした「しもつかれ」を試食し投票して、最多得票者が「鉄人」の称号を手にする。年々、人気が高まり、試食の順番を待つ長い行列ができています。

(注4) まぢ(まち) 「まち」は日待ち・月待ちの「待ち」であり、また、祭の意でも使われ、特に秋の特別な祭を指す。茨城方言では、語中・語尾の力行音・タ行音が濁音化する傾向にあり、「まぢ」となることが多い。

(注5) 臼 江戸時代、土浦河岸からは、当時の超ブランド商品だった醤油や年貢として集まってきた米が出荷された。一方、手野河岸からは、薪炭・材木などが出荷されていた。田村や沖宿の台地にあった雑木林から採れたものである。興味深いのは、臼も出荷されていることである。古代から、冠婚葬祭には必ず餅を搗いたので、臼は各家庭の必需品であった。手野河岸から大量の臼が江戸に送られていて、江戸の餅を震ヶ浦沿岸の雑木林が支えていたことが窺える。